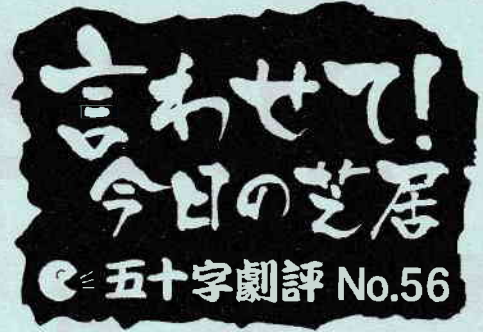


# 『青春の彷徨』 『或る「小倉日記」伝』

松本清張  
朗読劇シリーズ

前進座公演



▼何度見ても舞台には椅子と三人。でも確かに見えた阿蘇の噴煙、小倉の町を歩く親子の姿、並ぶ二台の人力車。  
(女性)

【四〇代】

(男性)

▼初めての朗読劇、芝居と変わらぬ面白さ、耳で聞くだけでもこれ程面白いのは、

余韻。

(女性)

▼目も耳も遠くなった私は、とても素晴らしい舞台上に巡り合った。情景がくつきり

【六〇代】

▼開演と同時に、何も無い舞台上に椅子に座った役者が三名で、演技がなく朗読のみという状況に違和感を覚えた。しかし物語が進むにつれ展開される朗読劇の情景がくつきりと浮かんでくるのと、三名の役者の朗読で演技する様子が凄いなと感じた。何も無い分、観る者の想像力で深く観ることもできるのだと感じた。上演された二作品の内、特に『或る「小倉日記」伝』が良かった。不自由な体ながら頭脳明晰で、一生懸命に資料調査・研究を続ける田上耕作と彼を支え続けた母親の姿に感動した。

▼ここ五年位の前進座の例会で最も良いと感じた舞台。座位の朗読で、これほど想像力をかき立てられるとは驚きであった。新しい舞台のジャンルを堪能した。

(男性)

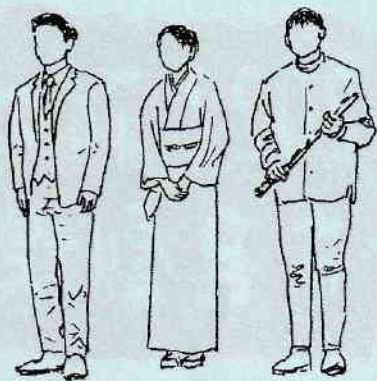
▼ラジオ劇を思わせる。脚本・効果音・声音、今なら声優のような、声の魅力。目をつむり想像の世界へ。

【七〇代】

と浮かんで来る。更に煙をくゆらす松本清張の姿までもが。  
(女性)

▼朗読劇は観たことがないと思っていました。始めてあつコレは聞いたことがあると、そうラジオでした。テレビの時代になってすっかり忘れていました。久しぶりに聞き、『青春の彷徨』





『或る「小倉日記」伝』の内容と朗読に感動（ラジオの内容は朗読は一本調子だった気がしますが）、目の前に光景が浮かんできました。お芝居とは違うかもしれませんが、以前の『ひとごころし』よりはるかによかったと私は思います。松本清張がこんな素敵な短編を出していたことも初めて知りました。

（女性）

▼朗読が始まるとすぐ芝居の世界に入れて面白かった。『或る「小倉日記」伝』の最後の場面は暖かみもあつて、さすが前進座。

（女性）

▼朗読劇でどうなるだろうか、いねむりしてしまうかと心配でしたが、ずっと面白く聞けました。出演者の顔が変化するので、ずっとあきる時がありませんでした。

（女性）

▼清張の小説の中で『或る「小倉日記」伝』は異色である。だが人生そのものがサスペンスフル。美しい女性が母として抱えた使命を果たして生きる姿は感慨深い。朗読劇は緊張感に満ちていた。

（女性）

#### 編集スタッフから

二〇二三年度六例会のラインナップが、ここ二三年と一番異なる点は、出演者の多い芝居が六本続くということです。それだけ舞台装置もしつかり作られて、観応えのある作品が並ぶということです。これは、きつと劇評も書き応えがあるはず。この機会を逃さず、みなさん劇評集に投稿してくださいね！